

上京という旅のかたち

慶応4年、近藤復堂の場合

荒垣恒明 成城学園教育研究所

1 ―― はじめに

本稿では近藤家に残された上京日記を素材として、近藤復堂（近藤三郎二）の足跡をできるだけ再現しながら、当時の「旅」について考えていきたい。特に注目したいのは、内容が詳細な慶応4年（1868）4月の「上京日記」¹⁾である。

史料目録²⁾を参照すると、上京日記は15点が確認できる（「上坂日記算用控」³⁾を含む）。それぞれの形式には若干の異同が確認できるが、大まかにいって、前半部に旅の行程、後半部に旅に要した経費がまとめられている。特に前半部分は出発から日付を追って記されているので、上京日記を読んでいくことで、時系列で復堂の動きを辿ることができる。

ここで取り上げる慶応4年4月の「上京日記」は、他の日記に比して前半部分の内容が詳細であり、復堂の行動の範囲と内容が多様である。以下では、この日記の内容から復堂の上京という旅のかたちを考えていくことにしたい。

2 ―― 行程・費用からみた復堂の上京

(1) 行程について

慶応4年4月の場合、上京の行程は、8日昼の2時前後に出帆し（牛窓であろう）、赤穂沖で日没を迎えている。晴天順風に恵まれて9日夕方4時前後（七つ時）に神戸に到着する。この時は、「異人屋敷」を中心に神戸見学に一日を費やしている。翌日に出帆、明け方4時前後（七つ前）に大坂に到着、11日まで買物

1) 史料目録-近藤家文書13、「上京日記」（慶応4年〈1868〉4月）。同月の記事は全て本号に依る。

2) 史料目録は、本書『東西南北2015』和光大学総合文化研究所、2015年、寺島「19世紀の旅日記」036～037頁に掲載。

3) 史料目録-近藤家文書11、「上坂日記算用控」（万延2年〈1861〉花）

などをして滞在している（この時に「安治川筋蒸気船ノ小船」を見物している）。そして12日の4時前後（七つ頃）に三十石船（淀川水運で活躍した小型の和船）に乗船して、翌13日の明け方に伏見に到着している。船宿浪花屋にて休息を取った後、昼過ぎ（九つ半頃）に人足を伴って伏見を出発し、徒歩で京都三条にあった宿泊先の伊勢屋に向かい、その日の内に到着している（到着時刻は不明）。

慶応4年4月の上京の際は、牛窓出発から京都到着までは五日間を要している。しかし9日の神戸滞在、11日の大坂滞在を差し引けば、実質的には海路・陸路あわせて三日程度で上京は可能であったことが分かる。

復路についても確認しておこう。この時は、4月24日朝に京都を出立し、伏見から三十石船に乗り、同日夕方4時前後（七つ半頃）大坂に到着している。そして翌月2日まで滞在している（この間、角芝居や浄瑠璃を観に行っている）。29日の夕方に岡山方面へ向かう船に乗り込むが、風の具合で直ぐには出船できず、二日後の閏4月2日に大坂の新堀を出発し、その日の夜半に室津に至っている。その後、悪天候のためしばらく滞船し、4日夕方4時前後（七つ頃）に出船、翌5日10時前後（朝四つ頃）に米崎に到着し、ここから漁船を借りて、昼前（四つ半頃）に帰宅している。

復路の場合、4月24日の京都出発から翌月5日の帰宅まで十日間かかっているが、大坂での滞在や悪天候での足止めを差し引けば、実際に移動に要した日数は、往路と同様に三日程度ということになろう。これは復堂が地元と京都を往復する際に要した平均的な日数であったと考えられる。同年9月の上京では、9月2日に出発し、途中で神戸見物などすることなく、4日午前中には大坂に着き6

図1 上京の往復についての略図



日まで滞在し、7日に入京を果たしている⁴⁾。幕末の上京日記としては安政6年(1859)のものが存在するが⁵⁾、往復の行程についての記載がない。そこで明治になってからの事例を参照すると、明治2年9月の上京の場合は、13日に牛窓を出船し、14日に明石着、15日に兵庫着、風と天候の具合のため17日まで逗留し、この日の夜中(八つ時、2時前後)に出船し、18日朝四つ時に大坂に到着している⁶⁾。

基本的ルートとしては、恐らくは付近の漁船などに頼んで番田から牛窓・米崎に出て、ここから京阪神方面に向かう船に乗り、神戸経由で大坂に至り、そこからは三十石船(中福丸、宝福丸)に乗船して淀川を遡り、伏見を経て徒歩で入京するというものであった(図1参照)⁷⁾。復堂の上京は、それほど大がかりな旅ではなかったが、それでも慶応4年4月13日の記事には、「此日、伏見稲荷宮之御神事アリ、草臥居くたびれおりもうし申候、拜見不致」とあり、この程度の往復の行程とはいえ、壮年の復堂にとっても決して楽な旅ではなかったことが示されている。

さて、こうした旅のあり方は、時代の移り変わりの中で少しずつ変化をしていったようである。明治9年(1876)の上京の際は神戸で上陸し、大坂までは汽車を利用して、大坂・京都(伏見)の往復には三十石船を使っている⁸⁾。同11年(1878)には、大坂までは船を使っているが、そこから伏見までは汽車を利用している(汽車賃は二人分で80銭)⁹⁾。神戸・大坂間の開通は明治7年(1874)5月、大坂・京都間の開通は明治9年(1876)のことであり、新しく登場した交通手段をいち早く活用していたことになる。また人力車の利用もたびたび確認できる。このように時代の変化に応じて、復堂の旅も影響を受けていることが分かるが、すべてが急激に変質してしまったわけでもないようである。

例えば明治11年(1878)の上京の場合、前述のように往路では汽車を利用しているが、伏見・大坂間の復路では、従来通りに三十石船(宝福丸)を使っており、乗船数日前には船頭が上京して復堂に面会している¹⁰⁾。京都での三十石船船頭とのコンタクトは、日記の中でたびたび確認できるが(表1、2参照)これは荷物の運搬など三十石船経営者のビジネスとしての動きという側面が強かったはずである。そうした関わりもあって、三十石船の利用が続いたのであろう。

4) 史料目録-近藤家文書14、「船中在坂在京中日誌」(慶応4年〈1868〉9月)、なお復路については大坂までの記載のみ。

5) 史料目録-近藤家文書7、「上京万日記」(安政6年〈1859〉仲夏)。

史料目録-近藤家文書8、「上京日記」(安政6年〈1859〉菊月)。

6) 史料目録-近藤家文書15、「上京日誌」(明治2年〈1869〉9月)。

7) 本稿掲載の図に関しては、本研究プロジェクトの協同研究員である鈴木努氏に一方ならぬ協力を得た。

8) 史料目録-近藤家文書19、「定例 直組上京諸入費記」(明治9年〈1876〉6月)。

9) 史料目録-近藤家文書23、「直組上京諸入費日記」(明治11年〈1878〉6月)。

史料目録-近藤家文書24、「醬油直組総代上京日誌」(明治11年〈1878〉11月)。

10) 注9に同じ。

表1 慶応4年（1868）4月上京時の交流人物

	場所	名前	備考
4月 11日	大坂	備前屋太兵衛	備前屋に立ち寄り
12日	大坂	葉守屋	馳走に預かる
13日	伏見	浪花屋十介	船宿
13日	京都三条	伊勢屋半兵衛	京都での宿泊場所
13日	伏見～京都	鉄五郎	上夫
14日	京都	出屋敷屋	
14日	京都	岩田屋	
14日	京都	中福丸太兵衛	晩に伏見より来る
14日	京都	鉄五郎	中福丸関係者？
15日	京都	太兵衛	召連
15日	京都	勝五郎	召連、宝物丸関係者
16日	京都	清風舎	五条坂陶工師
16日	京都	七兵衛	
16日	京都	安兵衛	案内者
17日	京都	安兵衛	案内者
17日	京都	岩田屋又左衛門	先斗町にて振舞の案内役
19日	京都	西屋	伏見へ下る
19日	京都	芳介	伊勢参宮より戻る
20日	京都	中福丸太兵衛	伏見へ下る
21日	京都	願岩彦	宿へ来る
22日	京都	出屋敷屋利介方	一杯呼れる
23日	京都	岩田屋又左衛門	
24日	大坂	備前屋太兵衛	宿泊場所
25日	大坂	備前屋太兵衛	一杯呼れる
27日	大坂	備前屋太兵衛	休息場所
28日	大坂	葉守屋	

表3 慶応4年（1868）4月上京時の費用

入金	内訳	金額
	持参金（「出船之節持参」）	15両
	西屋より借用（京都にて）	19両
	岩田屋より借用	10両
	「出利下り金之内」	35両
	竹五郎より借用	1両2歩
出金	内訳	金額
	小遣い（本家・西屋・手前）	9両3歩1朱
	同（本家・手前分）	20両2歩2朱/578文
	買物代	37両2歩2朱
	出屋敷屋へ仕留払	4両1歩3朱
	岩田屋へ渡し	6両1歩3朱
	鉄五郎へ渡し	1両
	残金、煙草入等	3歩
	使途不明（「欠」）	420文

表2 慶応4年（1868）9月上京時の交流人物

	場所	名前	備考
9月 6日	大坂	葉守屋	
6日	大坂	西屋	復堂に同道
6日	大坂	東屋	復堂に同道
6日	大坂	三木屋	復堂に同道
7日	京都	長太	
7日	京都	名波兵へ	
7日	京都	小松屋長兵衛	宿泊場所
8日	京都	西屋	
10日	京都	岩田屋	
11日	京都	出屋敷屋親子方	
12日	京都	出屋敷屋	
14日	京都	出屋敷屋	
14日	京都	中福丸船頭	
15日	京都	中福丸船頭	
16日	京都	岩田屋	
17日	京都	西屋	同伴にて伏見へ行く
17日	京都	東屋	同伴にて伏見へ行く
17日	京都	三木屋	同伴にて伏見へ行く
18日	伏見	難破屋	宿泊場所
18日	伏見	一条名波兵衛	直組
20日	大坂	芳野屋	直組惣代
20日	大坂	西屋	
23日	大坂	出屋佐	出屋敷屋のことか
24日	大坂	豊徳	
27日	京都	年行司	
27日	京都	老分	
10月 1日	京都	塩川文蔵	
2日	京都	宝福丸船頭	
6日	京都	宝福丸船頭	
7日	京都	龍野二塚屋	
7日	京都	中石権や	万屋手代
7日	京都	清兵衛	惣代
8日	京都	目貫屋	
8日	京都	老分	
9日	京都	目貫屋	
9日	京都	万屋	
9日	京都	中屋	
9日	京都	西屋	
10日	京都	年番兩人	
10日	京都	目貫屋	
10日	京都	西屋	
11日	京都	年番	一同集会
11日	京都	老分	一同集会
11日	京都	岩田屋	
12日	京都	芳野屋	
12日	京都	出屋敷屋	
12日	京都	中福丸船頭	
14日	京都	中福丸船頭	
14日	京都	児島屋	
17日	京都	年番	復堂が挨拶にいく
17日	京都	老分	復堂が挨拶にいく
18日	京都	岩田屋	
18日	京都	児島屋	
19日	京都	長太	
19日	京都	名波屋	

典拠：史料目録-近藤家文書14、「船中在坂在京中日誌」

(2) 費用について

慶応4年(1868)4月の上京の際に要した費用については、「上京日記」の最後にまとめられている。その総額は80両20歩1朱と1貫15文であった。この内訳を、入金と出金に分けてまとめたのが表3である。数字の合算に整合性のない部分もあるが(復堂の計算ミス、書き間違えの可能性もある)、概略を把握することは可能であろう。

入金で注目できるのは、出発の際には15両しか持参していない点である。さまざまな意味で、あまり現金を持ち歩かない方が得策だったのであろう。不足分をどう賄ったのかといえ、主に、商売仲間と考えられる西屋、岩田屋からの借用に拠っている。少しの持参金で旅立てるとするのは、京都・大坂には商売などを通じて形作られた交友関係が存在していたということであり、復堂の上京は「お馴染みさん」を訪ねて行くという性格のものでもあったことの一端が示されている(「出利下り金」については未詳)。

次に出金の部分に関しては判然としない部分がある。小遣いを本家・西屋・手前三軒分と本家・手前分に分けて記載していることの意味は分からない。この時の「上京日記」では、小遣いと買物代に分けて記載するわけでもなく、時系列に沿って出費を書き上げているわけでもなく、かといって完全にアットランダムに記載している訳でもない。復堂は何らかの意識に基づいて書き連ねていると思われるのだが、現段階では詳細は不明である。従って小遣いと買物代の区分についても判然としない部分があるのだが、明治2年(1869)9月の「上京日誌」¹¹⁾では、上京経費が小遣いと買物とに区別されて記載されているので、これをまとめてみると、以下ようになる。

[小遣い]

松茸代、天満にて支度代、酒宿代、仮箱代、松靄楼見料、青物代、美林酒、伏見より京へ人足賃、同酒手、三十石蒲団・枕借貸、同かねまし、同綱引、同川端、柿五つ代、かみ一つ、ふろせん、出屋敷屋振舞につき芸子・中居十一人へ纏頭、菓子代、月代、煙草代、扇子要直し代、ちり紙、薄草代、伊勢屋宿代、同茶料、同下男女へ、支度二人前、船賃、ふとん七つ、伏見浪花屋払、饅頭、同宿へ茶料、箱代、瓢箪代、旦那様へ祝儀

[買物]

履物、煙草入、千代久、小単、屋号判、黄銅挺目、相鉄瓶、つゝら織、銀赤銅金物、くさり、錦名札入金入、四分一小はせ、裏地錦紙入、四歩一金物、茶、五つ組鉢、平鉢、箱代、手紙、沓、沓下、縮緬、鼠返し、

11) 史料目録-近藤家文書 15、「上京日誌」(明治2年(1869)9月)。

表4は慶応4年(1868)4月の出費の状況を一覧化したものである。今これを十分に分析することは出来ないのだが、復堂の足跡を考える上での重要な参考になると思うので掲げておくことにする。近藤家文書15¹²⁾における記載をふまえて、表4を通覧すると、ある程度小遣いと買物代の弁別を把握することが出来る。すなわち物品の購入も旅の途上で必要となった品物は小遣いという形で処理されており、旅に関わる諸経費が小遣い、地元への土産に相当するのが基本的には買物と表記されていたようである。

旅に関わる諸経費というのは、月代代、煙草代など身の回りに関わるもの、人足駄賃、人足酒手などの必要経費、見物先での見料、茶代、菓子代などの出費などさまざまである。買物に関しても、扇子、茶碗、急須、鉢などの焼物、茶道具関係、袷、帯などの衣装類、藤倉草履といった履物など、内容は多様である。買物の注記に「本」とあるのは、本家に対する買物だったのではないかと考えられる。また「縮緬よだれ掛」や「子供遊び舟」などは、まだ幼い子息への土産であったのではないだろうか。「太政官日誌」、「興風集」など書籍の購入も興味深いところである。

なお宿代に関しては、先に近藤家文書15から拾い出した[小遣い]の中に「ふとん七つ」とか「伏見浪花屋払」(浪花屋は船宿)が計上されていることから、基本的に小遣いという分類で処理されていたようである。慶応4年4月の上京に際しては、4月24日に宿代として伊勢屋半左衛門に7両1朱と350文を支払っている。内訳は4両3歩2朱を13日から19日までの宿泊代26人前として、3歩3朱を13日から19日までの中飯代11人前として、3歩と350文を13日から18日までの酒代2人分として、3歩を15日の宿代として支払っている。ここには復堂の宿泊費だけではなく、伊勢屋を舞台とした宴会、接待といったものの費用も含まれていると考えられる。京都での宿泊については、基本的には伊勢屋半左衛門(伊勢半)を定宿としていたことが、他の上京日記からも確認することができる¹³⁾。

3——慶応4年4月上京における名所見物

(1) 神戸での見物

では80両以上を費やす旅において、復堂は何をしていたのだろうか。近藤家の上京日記を通覧していると、復堂が京都でさまざまな活動をしていたことが分かる。今でいうレジャー、ビジネス、ショッピングに相当する旅行であった。レ

12) 注11と同じ。

13) 史料目録-近藤家文書20、「直組上京諸入費日誌」(明治10年〈1877〉6月)。

史料目録-近藤家文書24、「醤油直組総代上京日誌」(明治11年〈1878〉11月)。

表4 慶応4年(1868)4月諸経費

日付	金額	費目	備考	日付	金額	費目	備考
4月				15日	265匁	本紅1反	
1日	3朱200文	ラチ引1組		15日	213匁	嶋傳多帯男1筋	
1日	1朱450文	徳利1つ		15日	31匁	縮緬よだれ掛1	
1日	300文	かんてら[]		15日	31匁	縮緬よだれ掛1	太兵衛へ音物
1日	2朱	子供下駄2足		15日	139匁5分	白郡内太之織1丈2尺5寸	
1日	2朱300文	女形下駄1足		15日	37匁5分	右上下地染代	
1日	350文	さじ3本		16日	300文	揚弓	
1日	3歩2朱	紙入1つ	本家分・手前分1歩3朱 ずつ	16日	2歩2朱	川ばた柳之葉や酒宿代	
3日	1朱	柄巻皮1つ		16日	350文	加茂にて御神事拝見腰 掛借り賃	
5日	2両1歩	妹尾船運賃(3人前3歩 ずつ)		16日	200文	(加茂にて御神事拝見) 菓子代	
5日	2朱	船頭へ祝儀		16日	200文	諸々茶せん	
5日	400文	饅頭代		16日	200文	諸々茶代	
5日	2歩1朱	船中酒宿代わり		16日	130文	直し代	
5日	2朱	前につき蛸代引		16日	2歩	急須1つ	
5日	1歩3朱	渡す		16日	2歩	染付1つ	「本」
9日	3朱	船中酒代		16日	1歩3朱	染付茶入1つ	「本」
9日	400文	生か代		16日	2歩1朱	染付茶碗5つ	「本」
10日	1朱/300文	鯛竹の子代		16日	2両	清風口払	1両2歩本家分、2歩手前 分
10日	2朱	すし		16日	2両/400文	焼物代(茶盤5つ、小 急須1本、雄山鉢1つ、 茶子器1枚	七条払、「本」、「手前分」
10日	100文	紅生姜		16日	3朱300文	(品目不明)	
10日	48文	風呂2人前		16日	2朱300文	(品目不明)	
11日	1両2歩	宗右衛門夏月形鉄瓶1 つ(箱入)	金屋清兵衛払、「本」	16日	2朱	釜敷1枚	
11日	2朱	仙徳水こぼし	金屋清兵衛払	16日	180文	茶台1つ	本家分
12日	1歩500文	菊徳頭2箱(5ヶ入)	長太・名波兵へ音物	16日	360文	茶台2つ	
13日	1歩	京行人足駄賃		16日	150文	筆立1つ	「本」
13日	400文	人足酒手		16日	2朱300文	染付井1つ	
13日	24文	茶代		17日	3朱/280文	鳥羽屋払い5人前	東寺裏門前
13日	1朱/300文	智恩院屋敷見料		17日	1朱	隅徳にて挨拶	
13日	100文	宝明神御守札		17日	1歩2朱	北野にて支度代4人前	
13日	1歩2朱	羊羹1箱	葉友へ音物	17日	100文	嵐山にて茶代	
13日	1歩2朱	羊羹1箱(皮包1つ)	岩文・出利へ音物、「本」	17日	1貫400文	大小払	
13日	1歩	羊羹1箱	「本」	17日	200文	嵯峨にて菓子代	
13日	1両	扇子代	山崎屋払	17日	200文	松之尾へ御初穂	
13日	3貫500文	二本物70本		17日	1朱	菓子代	
13日	1貫	五色5本(箱入)		17日	300文	たばこ	
13日	1朱	白扇5本	購入日時4月13日カ	19日	1歩1朱200文	袴1つ(太兵衛宿へ遣る)	
13日	3貫	五色扇3箱	購入日時4月13日カ	19日	1朱	小遣い	
13日	1貫500文	二本物30本	購入日時4月13日カ	19日	1歩/300文	茶たて5つ	
13日	625文	円扇5本	「手前分」	19日	2朱/180文	短冊代	
14日	200文	かみ2つ		19日	2歩1朱	名家全部	「本」
14日	100文	紙代		19日	1歩	興風集2冊	
14日	2貫100文	酒2升代船へ積		19日	2朱/44文	太政官日誌9冊	在所行き分3冊
14日	144文	直し代		19日	1両2朱	羅紗紙入1つ	
14日	42文	薬代		19日	1両2朱	羅紗紙入1つ	
14日	400文	月代4つ		19日	2朱	煙草1箱	
14日	18文	茶せん		19日	1朱	でんぶ1曲	
14日	1歩/150文	浄瑠璃入用		19日	2朱	(品目不明)1本	
14日	100文	茶代		19日	1朱200文	(品目不明)	
14日	48文	宿代かへ	芳介へ渡す	19日	2歩	鼠色拾1掛	
14日	224文	金閣寺拝見		19日	1歩3朱	鼠色拾1掛	拾着払
14日	224文	銀閣寺拝見		20日	100文	かみ代	
14日	2歩1朱	柳茶屋酒宿代		21日	1両	紅溜木皿40	
14日	1歩	住吉にて酒宿代		21日	3朱	新茶2袋	
14日	3歩	合田分島帽子1頭	中村佐右衛門払				
14日	2朱と200文	柄巻皮1つ	「本」				

日付	金額	費目	備考
21日	10貫750匁	生喜撰小半	新茶1袋（1朱355文）は 本家分、3朱/95文は手前 分
21日	1歩2朱	紅代	「本」
21日	3朱	紅代（十二千代久）	「本」
21日	[]文	茶ミ1つ	
21日	500文	茶ミ1つ	
21日	200文	茶ミ1つ	
21日	200文	さし10本	
21日	1歩1朱	香5包	
22日	300文	かみ3つ	
24日	4両3歩2朱	泊り代26人前	4月13日～19日
24日	2歩3朱	中飯代11人前	4月13日～19日
24日	3歩/350文	酒4升2人分	4月13日～18日
24日	3歩	15日宿代	伊勢半払
24日	3朱300文	手引飯料3度分	
24日	1歩1朱	手引三日分日雇	
24日	1両1歩3朱	泊り代13人分	4月19日～23日、1人前3 朱
24日	3歩1朱	中飯代13人前	4月19日～23日、1人前1 朱
24日	1歩1朱	泊り代3人前	4月23日
24日	1朱200文	手引日雇賃	飲料共
24日	1歩3朱/440文	酒2升6合	
24日	2朱	宿代	
24日	2朱	すし代	
24日	2朱	伏見まで人足賃	伊勢半払
24日	1歩	伊勢半へ薬代	
24日	1歩	伊勢半下女へ	
24日	1歩	伊勢半本家へ	
24日	3貫	三十石下り10人前舟賃	
24日	200文	下敷蒲団代	
24日	348文	火鉢代	
24日	1貫500文	支度3人前	
24日	900文	弁当3人前	
24日	300文	弁当1人前	
24日	2朱	難波屋へ茶代	
26日	400文	月代4つ	
26日	5両2歩	紺博多女帯1筋	
26日	2両3朱	紺博多男帯1筋	
26日	1歩3朱	小倉帯1筋	
27日	2朱	本	
27日	2朱	煙草入金具代	
28日	1歩	子供遊び舟1艘代	
28日	2朱	昆布1枚	
28日	2朱	六〇八持論1	
28日	2朱	中着1	「本」
29日	2両	太兵衛宿へ飲料包	
29日	2歩	同人聲喜介へ諸々見物 処手引、且土産屋来心 付包、船場へ荷物送り	
29日	2朱	下男へ	
29日	2朱	お琴へ	
29日	1朱	三味線引徳藏へ	
29日	4両1朱/250文	角芝居行諸人用	
29日	2朱	茶せん	
29日	1朱	金山寺味噌	
29日	3貫文	藤倉草履6足	

日付	金額	費目	備考
29日	1貫600文	藤倉草履女形4足	
29日	1貫800文	藤倉草履男形2足	
29日	1貫文	藤原草履男形2足	「本」
29日	800文	尾張扇2本	
29日	2朱400文	尾張扇女形上2本	
29日	2朱	尾張扇女形中4本	
29日	300文	尾張扇女形1本	
29日	150文	懐中火打	
29日	500文	かけ物2箱	
29日	100文	手遊び	
29日	1朱	本・続幼学便覧1	
29日	3歩2朱	よし屏風半双	
29日	1朱	蛇頭石2つ	
29日	1朱	小草履1足	
29日	[]朱	人形1つ	
閏4月			
1日	1歩	豊後屋徳兵衛へ薬代	
1日	1朱	天満にて支度代	
1日	250文	たばこ	
1日	48文	風呂	
2日	2朱	船中蛸代	

注1：近藤家文書13「上京日記」では、諸経費は、日付ごとに書き上げられていたわけではないが、表化するに際して、時系列に沿う形でまとめ直した。

注2：金額欄において、「2朱/44文」とあるのは、原表記では「2朱と44文」となっていることを示す。

注3：費用に注記が存在する場合、備考欄において「 」の形で示した。

ジャーというのは、京都あるいは寄港先の神戸で名所を見物することが中心である。ビジネスというのは、主に醤油の「直組」について、商売仲間や年番、老分（おいぶん、ろうぶん）たちと交渉（対面や集会）することが主であった。ショッピングというのは、自家のため、本家のために、京都において様々な物品を買うことが中心である。慶応4年4月の場合、このうちのレジャーの側面、すなわち名所見物が大きな比重を占めているのが特徴的である。

この時、往路で神戸に立ち寄り居留地の見物をしている。この時の様子を、復堂は日記に次のように記している（4月9日）。

神戸郡へ滞船揚陸異船凡十二・三艘滞船、
陸ニハ 異人屋敷美々敷事 生田森之前ニ異人屋敷地取
立候之地面、凡七・八丁四面平地

（行間補入）

「八万七千坪」

ニ而夥敷事、今有処之屋敷ハ 凡異人館運上所一ヶ所、
日本運上所一ヶ所、但シ異国造り諸物
売買所七・八ヶ所中ニ酒店・牛店

（行間補入）

「ブリキ作り之館アリ、工人南京人」

等アリ、酒店ニハ女人売居申候、市中ヲ異人、馬上ニ而
徘徊致し居申候、馬ハ異国ノ馬ナリ、犬モ数疋渡来

（行間補入）

（行間補入）

「白馬アリ」

「大小アリ」

このように復堂は、普段は見ることのない異国の文物に対する感想を興味深げに綴っている。引用部分に続いて、「異人ハアメリカ・フランス・ロシア・南京等ナリ、尤南京人ハ 日本人ニヨリニタリ」とも記されている。一見当たり前のことを、わざわざ指摘しているのは、それだけ「異人」が未知の存在であったことの表れであろう。今ほど情報が普及していない時代には、見物は、レジャーとしての観光であるとともに、未知の事物にふれる貴重な機会でもあった様子を、ここから知ることができる。

（2）京都での見物

この時、復堂は旺盛に京都の名所めぐりをしている。あたかも観光ガイドブックに沿って回ったかのようである。具体的な行程は表5に示した通りである。4月15日には東山方面、16日には上京、左京方面、17日には下京から嵯峨・嵐山方面、19日には洛中から洛北方面、20日には主に東山方面を見物に回っている。

各所での見物について詳述することは避けるが、例えば、京都見物の始まりであった15日の智恩院見物に関しては、次のように記されている。

智恩院 飛驒ノタクミノ作

本堂ニ傘アリ

鶯張ノ廊下

千畳敷ノ間

台所之門前瓜石アリ

表5 慶応4年（1868）4月見学地

日付	地名	場所	見料	備考	日付	地名	場所	見料	備考
4月					17日	京都	嵯峨ノ虚空蔵		法輪寺
9日	神戸	異人館			17日	京都	嵐山		
15日	京都	知恩院	1朱300文 (屋敷見料)		17日	京都	天龍寺		丸焼け
15日	京都	長楽寺			17日	京都	野々宮社		小柴垣など
15日	京都	双林寺			17日	京都	小倉山ニ尊院		
15日	京都	高台寺			17日	京都	祇王寺		
15日	京都	大雅堂旧跡			17日	京都	清涼寺		
15日	京都	鳥辺山		おしゆん伝兵衛之墓	17日	京都	大覚寺		
15日	京都	三年坂			17日	京都	御室御所		
15日	京都	清水寺			17日	京都	北野天満宮		北野河内屋支度
15日	京都	西大谷			18日	京都			「草臥休足」
16日	京都	祇園社			19日	京都	二条城		太政官御門通る
16日	京都	本能寺			19日	京都	平野社		西陣
16日	京都	一条高(革)堂			19日	京都	金閣寺	224文	御庭拝見
16日	京都	下御霊八社神社			19日	京都	今宮社		
16日	京都	禁裏御所		各藩の軍隊駐留し、見学 はできず	19日	京都	大徳寺		
16日	京都	下賀茂糺之森			19日	京都	銀閣寺	224文	御庭拝見
16日	京都	川合大明神			19日	京都	法然寺		
16日	京都	吉田社			19日	京都	安楽寺		
16日	京都	百万遍智恩寺		陣所のため門前を通るの み	19日	京都	霊源寺之宮		
16日	京都	真如堂		極楽寺・神楽丘という	19日	京都	若王寺		
16日	京都	東北院			19日	京都	永観堂		紀州御下陣のため入れず
16日	京都	(黒谷) 金戒光明寺		陣所のため門前を通るの み	20日	京都	方広寺		大仏、唐人耳塚、大釣鐘
16日	京都	聖護院			20日	京都	三十三間堂		
17日	京都	六角堂		西国十八番札所	20日	京都	新熊野鋸之宮		
17日	京都	東本願寺		長州公御下陣のため見学 許されず	20日	京都	今熊野		西国十五番順霊所
17日	京都	西本願寺		長州公御下陣のため見学 許されず	20日	京都	千入寺(泉涌寺)		
17日	京都	東寺			20日	京都	東福寺		
17日	京都	嶋原	1朱 (隅徳に て挨拶)	隅徳座敷見学	20日	京都	伏見稲荷宮		
17日	京都	六孫王権現			20日	京都	藤之森		
17日	京都	松之尾社			20日	京都	御香之宮		
					25日	大坂	天満宮		
					25日	大坂	両御堂		北新地
					25日	大坂	堂島		御霊へ見学に行く
閏4月					1日	大坂	異人東御堂		風悪しきため、行列を見 物
					1日	大坂	三井、岩崎、 鴻之池辺		

大釣鐘 長一丈六尺
渡 九尺五寸
厚 九寸五分
目方二万貫目
寛永中ニ鑄ル

茶所ノ釜
慶長九年三月十三日ニ
鑄ル

糸桜
山門ノ額 寂如上人御筆

御座敷拝見

見料五つニ付
壹朱三百文

源氏屏風 土佐光信
鶴之間 狩野直信
上段之間 同 筆

菊ノ小屏風安信之筆

中段ノ間 同 筆
下段ノ間 同 定信
大床ノ間 同 正信
奥上段ノ間 同 筆

小屏風土佐光起之筆

中段之間 同 筆
羅漢ノ間 大法眼元信
花鳥ノ間 同 定信
勸学ノ間 同 筆

山吹之小屏風探幽之筆

裏上段間 同 筆「光信」

菊小屏風安信之筆

菊之間 同 筆

ヌケ雀アリ

鷺之間 同 正信

大津笠 柳之龍 尚信之筆

○柳之間 同 定信

不二之屏風永徳筆

外ニ数多拝見致し

候得共、荒増記ス
○梅之間 同 定信

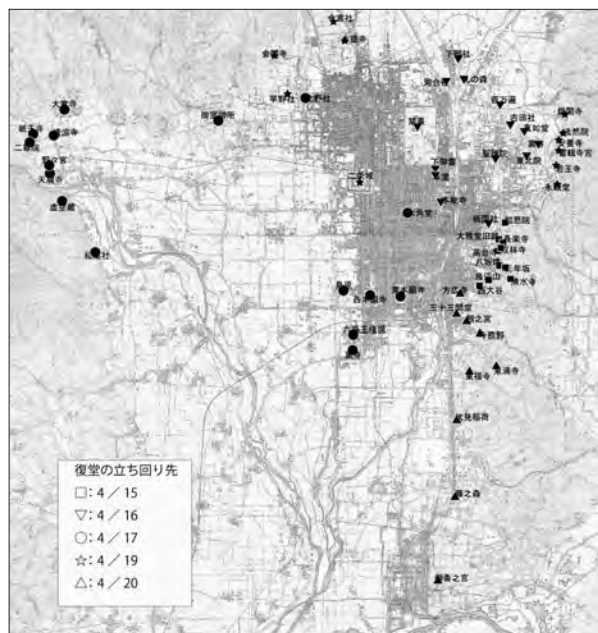
これらの記述からは、浄土宗総本山で、現在も著名な観光地として知られる知恩院を詳細に見物していたことが分かる。「飛驒ノタクミ」とは伝説的な名工・左甚五郎のことで、本堂（御影堂）の正面の軒下には、甚五郎が魔除けのために置いたとされる骨だけの傘が、「忘れ傘」としていまでも残されている。「鶯張ノ廊下」も知恩院の名所で、全長 550 メートル近くある廊下のことで、歩くと鶯の鳴き声に近い音がすることで知られている。「台所之門前瓜石」とは、現在でも「うりゅうせき瓜生石」の名で呼ばれ、知恩院建立以前から存在するなど、さまざまな言い伝えを持った大きな石のことである。「大釣鐘」も有名なもので、寛永 13 年（1636）第 32 世雄誉霊巖上人の時に造られたものと言われており、その意味で「寛永中ニ鑄ル」という記述は正しい。

見料を払って拝観した「御座敷」とは方丈のことと考えられる。知恩院の方丈には大方丈と小方丈の二つがあり、寛永 18 年（1641）の建立で名書院として知られていた。特に大方丈は書院造りで、鶴の間を中心に、上・中・下段の間などいくつかの部屋に分かれており、ここを復堂はしっかりと見て回っている。復堂の記述にも示されているように、方丈には、狩野派の襖絵が多く残されている。

以上からも分かるよう

に、見るべきスポットを押さえながら、復堂は、知恩院をかなりきちんと見物している。引用部分の「外ニ数多拝見致し候得共、荒増記ス」とあるように、見た物全てを詳細に記録したわけではない。それでもこれだけ正確に見物記を書くことが出来たのは、一つには復堂が京都案内のような書物から事前に予備知識を得ていたこと、もう一つには、ツアーコンダクターともいうべき存在が同行していたことが関係しているだろう。同日の条

図2 復堂の京都での名所めぐり（慶応4年（1868）4月）



には、知恩院に向かう前に「昼より太兵衛・勝五郎召連」とあり、おそらく彼らが復堂の案内者であったと考えられる。

こうした見物のあり方は知恩院だけに限られるものではなかった。表5に示されているように、15日～20日にかけて文字通り精力的に各所を見て回っている。上京日誌による限り、これは慶応4年4月の上京のみに確認できる特徴である。なぜこの時、復堂は、京都中を精力的に見物したのであろうか。慶応4年4月だけというのは、確かに名所見物は一度経験してしまえばよいというものだったのかもしれない。しかし、こうした現代の観光旅行的感覚だけで理解してしまって、果たしてよいのであろうか。

注目すべきなのは、慶応4年4月の京都というタイミングではないだろうか。周知のように、この年の1月の鳥羽・伏見の戦いに端を発して戊辰戦争が始まった。4月の段階では戦場は北関東および東北に移っていたが、実戦から3ヶ月しか経っていないという意味で、京都は未だに戦火冷めやらぬ時期であったといえる。そうした戦場の雰囲気は、上京日誌の中にも色濃く刻印されている。知恩院などを巡った翌日(16日)、復堂は中京、上京方面に出向いており、禁裏御所(京都御所)の様子について、次のように書き留めている。

禁裏御所

此日諸御門御警衛、左ニ記ス

堺町御門	下立売御門
越前公	藤堂公
蛤 同	中立売 同
長州公	因州公
乾 同	今出川 同
薩州公	加州公
石薬師 同	清和院
彦根公	備州公
寺町	日野御門前
肥後公	土州公
内侍所	南門前
同 人吉公	尾州公
公家御門前	台所御門
阿州公	藤堂公
同 御門内	朔御門
伊予吉田公	芸州公

御所は嚴重に警備されていたのである。直接の戦火は去ったとはいえ、緊張感

は未だ漂っていたのである。復堂が諸藩の配置をきちんと記すことができたのは、この時の案内者であった安兵衛という者の教示があったか、陣営から確認できた旗印からの類推かのいずれかが関係しているだろう。

同じ日に、左京に所在する通称「くろ谷」と呼ばれる金戒光明寺も訪れているが、「御陣所ニ而、門前通ル」とあるように、ここは陣所であったため通過するだけで済ませている。この金戒光明寺は、新撰組の指揮官であった会津藩主・松平容保が、京都守護職の本陣としていたことでも知られており、そうしたことも関係して、この時期にも要衝として兵が置かれていたのであろう。

翌 17 日には、同じく安兵衛の案内のもと下京、右京方面を巡っている。西本願寺に立ち寄った際は、飛雲閣（伏見城から移築したとされるものであろう）の拝観を願い出るものの、「長州公御下陣ニ而拝見ヲ不許」、すなわち長州藩の陣所となっていたために拝観を断念している。さらに嵯峨の天龍寺に関しては「丸焼ケ」と記している。天龍寺は元治元年（1864）に起きた蛤御門の変の際、長州藩の陣所となっており、そのために灰燼に帰したのである。復堂はその情景を目の当たりにし「丸焼ケ」という表現をしたわけである。19 日の見物の際は、永観堂（左京の禪林寺）を訪れたものの、「紀州御下陣ニ而、入ヲ不許」という有様であった。

以上のことを踏まえると、表 5 に示される京都の名所見物は、一見、今でいう観光やレジャーに類する行動のようにも見える。しかし未だ戦火冷めやらぬ京都で、軍隊の駐屯地を縫いながらの見物であったことが分かる。こうしたいわば準戦地ともいえる京都での見物を、単純な物見遊山と位置づけることはできないだろう。確かに行楽という側面が存在していたことは否定できないが、それとともに、戊辰戦争直後の京都の状況を見て回るという意味が存在していたことも考慮すべきではないだろうか。それは単に実地を見聞したというだけではなく、幕末・維新の動乱期を経た京都で商売を展開していく上での〈地均し〉という意味の見物だったのではないだろうか。寺島論文で詳述されているように、この時期が京都での醤油商売の本格化の前段階にあたっていることもふまえながら考えていくことが必要であるだろう。

4——「上京」という旅の意味

この点は、慶応 4 年（1868）の 9 月の上京の様子と比べてみればより明らかとなる。前述のように、この時の状況を示した「船中在坂在京日誌」¹⁴⁾によれば、9 月 2 日に出発し、10 月 20 日に帰宅する上京であった。4 月の上京よりも約半月長い大坂・京都での滞在だったが、復堂の行動には、4 月の上京と比べて変化

14) 史料目録-近藤家文書 14、「船中在坂在京日誌」（慶応 4 年〈1968〉9 月）。

がみられる。在京期間は約半月ほど長かったにも関わらず、復堂は名所見物にはほとんど時間を費やしてはいない。むしろこの時は京都に居ながら、宿に一日中留まることの方が多かった。「在宿」と記された日は13日にも及ぶ。4月の上京の際に、神社仏閣を精力的に回った翌日に「休足」のため在宿する以外は、基本的には外出ばかりであったこととは対照的である（ちなみに雨天でも晴天でも在宿しているので、天候に左右されたわけではない）。9月の際の「在宿」は、休息のためではなく、商用に関わるさまざまなことをしていたのではないかと考えられる。

表1と表2を対照すれば明らかなように、9月の上京の際は、4月の上京と比べて、出先で交流している人物の数が明らかに多い。これは単純に交遊を深めているというのではない。この時は、4月の上京日記にも登場する西屋等と共に、「直組」のことについて、年番や老分らと対面や集会をしていたことが分かる。また「直組」に関わる交渉の中で、「破談之返答」等ともあり、なかなか難しい交渉をしていた様子を窺い知ることできる。こうした点を踏まえれば、9月上京の際の「在宿」は、やはり商用の一環として捉える方が自然だと思われる（直組交渉の下準備など）。

以上の点から4月の上京は、9月の上京と併せて考える必要があるように考えられる。すなわち9月に実質的な商用で動いていることを考慮に入れれば、4月の上京は、幕末以来政争の舞台となり、戦禍も被った京都で実質的な活動を再開するに際しての下準備、下調べという性格が強かったと位置づけられるのではない。精力的な神社仏閣めぐりは、やはり単なる物見遊山というだけではなく、さまざまな意味での情報収集（京の現状確認）という意味合いも強かったようである。

前掲の表4を参照すると、4月19日に金2朱と44文で「太政官日誌九冊」を購入しており、そのうち3冊については「行在所」としている。「太政官日誌」という存在に注目し、最新の情報を得るために購入をしているわけである。寺島論文でも指摘されているように、京都に来るといのは、取りも直さず最新の情報にアクセスするということでもあり、慶応4年4月の京都での復堂の足跡も、この点を踏まえながら理解していく必要があるのではないだろうか。

5—— おわりに

慶応4年4月の上京日誌の内容を中心に、復堂の旅について考えてきた。行論中に示されているように、復堂の上京という旅は、今日的な意味でいう旅のレジャー、ビジネス、ショッピングという要素を全て含み込んでいた。そして重要なのは、こうした旅のいくつかの要素が、一つの日記の中にまとめて記されているという点である。

4 月の上京における精力的な名所見物を、物見遊山として位置づけることも可能であろう。しかし前述したように、周辺状況を踏まえた場合、そこには「観光」という言葉では片づけられない性格を見出すこともできる。そもそも当時の旅をレジャー、ビジネス、ショッピングといった要素で分別することにどれだけの意味があるのだろうか。

今ほど交通事情や情報伝達が発達していなかった時代においては、目的を絞って旅をするなどという、現代人の発想するようなあり方は存在しておらず、旅（ここでは上京）という行為の中で出来ることは全てやる、というのが自然の姿だったのではないだろうか。近藤家文書の残された上京日記は、そんな当時の旅のかたちを理解する上で好適な事例なのである。

[あらがき つねあき]